

プロティノスにおける魂の両義的規定の意味

——『エンネアデス』IV(2(4))の解釈——

植田 かおり

序

「魂の本質について」と呼ばれる『エンネアデス』IV(2(4))において、プロティノスは「分割不可能かつ分割可能」という魂の両義的規定の意味を論じているが、その論じ方の独自性は注目し値する。すなわち、まず知性と物体の比較がなされ、次いで両者の中間者として物体内形相のあり方が論じられ、これら三者との位置関係と性質の比較の下に、最後に魂の本質が詳述されるに至る。その結果、知性、魂、物体内形相、物体という四者からなる枠組みが示されることになるのであるが、これら四者の枠組みの明確且つ詳細な提示の下に魂を論じたテキストはIV(2(4))以外にはないのである。このことから、IV(2(4))の論述内容が『エンネアデス』の魂を論ずる他の箇所に対して特権のないしは規範的意義を有していると思込むことができる。実際、魂の「分割不可能かつ分割可能」という規定にかかわる並行テキストはIV(2(4))より後に書かれた論文に散見されるのであるが、これらの箇所の中にIV(2(4))にはない要素を見出すことが度々あるとして

も、それらは“shifts of emphasis or cases where Plotinus will restate more carefully views on a problem he has handled before”⁽³⁾に類するものであることが出来るのである。つまりそれらの並行テキストは、概してIV(2(4))の魂の本質規定をなぞりつつ、あるいは感覚の問題を論じる場面において魂の一的側面が強調され、あるいは知性との比較において魂の多的側面に焦点が当てられるという風に、それぞれの文脈に応じた語り方がされていると見ることが出来る。各文脈において個性的な論理構成を生みだしたものがそれぞれ何であるのか、それについてはおくとして、魂の本質について全体的視点の下に体系的な説明が試みられているIV(2(4))のテキストの検証を通じて、魂の両義的規定の意味を明らかにしたい。それが本稿の第一の目的である。

上に述べたIV(2(4))の独自性に対しては、さらに、何故魂の本質を語るための枠組みを構成するのが上述の四者であるのかという問いが、当然生じてくる。本稿の第二の目的は、この問いに取り組むことである⁽⁴⁾。

上記二つの目的に向かって論じる前に、IV(2(4))における魂の

本質を語る場の設定と、論述の特徴を確認しておきたい。IV 2(4)は、「魂の不死について」と呼ばれるIV 7(2)の議論に引き続き魂をテーマとするのであるが、「魂の本質について」の通称も示すように、一層原理的な問題を扱うものであり、先行の論文とは異なる前提の下に議論の場が設けられている。すなわち、IV 2(4)の冒頭で、プロティノスは次のように述べている。IV 7(2)においては「知性的存在と感性的存在を区別し、魂が前者に属することを明らかにした」のに対し、IV 2(4)では、魂が知性的存在に属するという前提に立った上で「(IV 7(2)より)先に進むのがよい」と述べ、「(IV 7(2)とは)別の道を通って魂の本性の独自の点に迫ろう」と呼びかけるのである。魂をめぐる探求の次元が深まることが予告されているわけであるが、このような前提の確認と探求の方法的自覚は、両論文における「魂」の語が指示する内容の範囲の違いと、また、それぞれの論文が主に依拠するプラトンの著作の違いとに対応している。すなわち、IV 7(2)では、魂を物体とするストア派の説、またピュタゴラス派の「調和」説やペリパトス派の「現実態」説への反駁を通じて、魂が非物体であり、物体を必要とせずに独自に存在する知性的存在であることを論じつつ、『パイドン』と『パイドロス』の魂の不死証明の議論に基づいて個人の魂の不死を主張するのであるが、これに対してIV 2(4)は『ティマイオス』35aの世界制作者(デミウルゴス)による魂の制作の神話を解釈する議論になっており、かくしてここでは知性界と感性界の中間に位置づけられるものとして二世界説的な世界観に組み込まれた魂の全体像が視野に入れられることになっているのである。かかる「別の道」とは、権威ある宇宙創造説が含意する存在

論的体系の中へ魂を位置づける仕方と魂の本性を論じる道なのである。言い換えれば、存在論的地位を異にする二つの世界の仲介としての魂の役割ないし存在論的形而上学的な位置が、魂の本質を規定する根本的要素と見られているのである。

IV 7(2)論文と比べたときIV 2(4)が持つ探究上の価値とは、さしあたり、それが体系的視点を有しているということにあると言えるであろう。この体系的視点は、『ティマイオス』35aの、世界制作者による魂の制作の記述の体系構築的解釈として語られているのであるが、その解釈には明らかに特徴的な点が二つある。まず一点目は、『ティマイオス』35aの魂の創造の場に登場するのは、「分割不可能な有(知性対象)」、「諸物体の領域で分割可能な有(諸物体)」、および両者から混合されて造られた「第三の有(宇宙の魂)」の三者であるのに対し、プロティノスの『ティマイオス』解釈においては四つの本性が論じられている点である。プロティノスは「諸物体の領域に生じる分割可能な有(Tim. 35a2-3)」の表現を、諸物体を示す迂言的表現とは解さずに、「諸物体の領域に」を「分割可能」に対する限定句ととり、その結果、『ティマイオス』35aでは占める場を与えられていない物体内の形や質を、体系の構成員の一つに数えることになっている。プロティノスの『ティマイオス』解釈にこの四つ目の本性が登場し、他の三つの本性と並べて語られることは、どのような意味を持つのだろうか。このことを、単純に解釈の妥当性や正誤という観点から評価することも出来るのかもしれないが、我々は、プロティノスが四つの本性を言説として立てたこと自体の解釈学的価値について考えてみたい。

二点目は、一点目の特徴と深く関係していると考えられる

が、四つの本性が、「分割可能」と「分割不可能」という対立概念をものさしとして相互に比較対照されつつ特徴付けられている点である。つまり、この議論は、「分割可能」と「分割不可能」を両極化し、その中で差異化をさらに進めるといいう仕方、それぞれの本性におけるこれらの概念の意味を厳密化するのである。そして、その厳密化によって「分割可能性」を基準にした四者の階層的解釈が成立することになっている。従って、IV 2(4)における『ティマイオス』35aの魂創造神話の解釈は、魂の両義的規定「分割不可能かつ分割可能」の厳密な意味解釈の試みであると云ってよいであろう。

以上の問題意識の下に、我々は、IV 2(4)の論述の順序に従って、この四つの本性の規定が如何に語られているのかを見ていくことにする。まず、物体と知性についての論述を検討し、両者を両極化することで体系的論述がどのような構成を成すものとなっているかを検証する。次に、『ティマイオス』35aの解釈において新たに導入されたように見える物体内形相の両義的規定の意味を明らかにし、IV 2(4)の説明体系におけるこの本性の位置づけを考察したい。最後に魂の両義的規定が意味するものを

物体の本性

τὰ πρῶτως μεριστά

(第一義的に分割可能なものたち)

① τὰ αἰσθητὰ μεγέθη καὶ οἱ ὄγκοι

(感覚される大きさと、すなわち塊)

考察し、IV 2(4)における魂の本質をめぐる議論の意義ないし価値について論じたい。

1 体系的論述における両極の設定

— 物体の本性と知性の本性

プロティノスはまず、説明体系の両極に位置する二つの本性、すなわち、物体の本性と知性の本性とを対比的に論じることから始めている。この両極の設定の論述から、魂の本質を語る説明体系全体がいかなる特徴をもつものであるかを見ていくことにしよう。

両者が語られる順序を見てみると、まず始めに下方の極である「第一義的に分割可能なものたち」として物体の本性が語られ、次いで、これと対極にある本性として「決して分割を受けない有」として知性の本性が語られる。知性の本性はさしあたり物体の本性の述語の否定形で語られる。従って、この順序は、四つの本性を特徴づける基準となる概念が分割可能性であることに起因していると考えられる。それは、分割を前提とする物体におけるかかるともいうことができる。

両者の論述を図式化すれば次のようになる。

知性の本性

οὐδαμῇ μεριστὸν ἀεχόμενον οὐσία

(決して分割を受けない有)

① διδοτητὰ τε οὐδὲν οὐδὲ δι' ἐπιβολῆς ἀεχόμενον

(思考の上でさえも空間的延長を受けない)

② ἕκαστον ἴδιον τόπον ἔχει
(各々が固有の場所を持つ)

③ οὐδὲν μέρος ταῦτων ἐστὶν οὔτε ἀλλῶ μέρος οὔτε τῶ ὅλῳ
(どの部分も、他の部分とも全体とも同一ではない)
οὐκ οἶόν τε ἅμα ταῦτων ἐν πλείοσι τόποις εἶναι
(多くの場所の中に同時に同一のものとしてあることが
出来な^い)

② οὐ τόπου δεξιμένη οὐδ' ἐν τιμὶ τῶν ὄντων
γινωμένη οὔτε κατὰ μέρος οὔτε κατὰ ὅλα
(場所を必要とせず、部分的にも全体的にも存在するもの
ごもの何かの中に生ずることはない)

③ πάντων ὁμοῦ τοῖς οἷσιν ἐπιχοιμῆν
(同時に全ての事物の上に乗っている)
δεῖ κατὰ ταῦτα ἔχουσα οὐσία
(常に同一である有)

物体が「第一義的に分割可能」であるのは、物体の本性が「塊 (ὄγκος)」であるから、すなわち物体が空間的延長をもつからである⁹。空間的延長をもつことと「分割可能」の関係を語る推論は次のように整理することができる。

物体は「塊」である①。従って、物体及び物体の各部分は自らが占める場所が特定され、その場所の中にあることになる②。従って、物体及び物体の各部分は、自らの場所と異なる他の場所の中にある物体や物体の部分と同一であることが出来ず、結果として多くの場所に一挙に同一のものとしてあることが出来な^い③。すなわち、物体は、それ自体の「塊」という本性により「分散するものごも (κεκαστά)」なのであり、このことが「第一義的に分割可能」であることの意味である。

知性の本性についての論述の①と②は、物体の「分割可能」についての推論過程の各主張を否定した形でそのまま過程

を作るいわば裏返し¹⁰の推論になっている。ここでは、知性と物体を分ける尺度はさしあたり物体の本性におかれているのである。すなわち、知性は空間的延長 (διαστήμα) を持たない① || ①の否定)。従って、知性は場所を必要とせず、空間的延長を持つ他の何ものかの中に生じることもない故に、それらによって場所的に特定されることがない② || ②の否定)。

注目すべきは②から③への論述の大きな転換である。否定的表現での論述になっているのは②までであり、③において、知性に対する述語は肯定の表現に転じるのであるが、それと同時に、知性を語る視点は、知性が万物の「中にな^い」という視点から、知性が万物の「上に乗っている (ἐπιχοιμῆν)」という視点に移るのである。知性の「同一」はもはや物体的なあり方の否定ではなく、万物に対する超越的遍在のあり方として語られ、円の中心点に喩えられている。この③の肯定的表現による「分

割不可能な本性」の叙述は、『ティマイオス』のテキストそのものからは直接には導き出されない要素を含んでいると思われるので、それを詳しく見ることにしよう。

「この有は」いわば、同時に全ての事物の上に乗っているのであるが、それは、この有が全ての事物の中に座を得るためではなく、他のものどもが、この有なしには存在することが出来ないからであり、またこの有がないことを望みもしないからであるが、それは常に同じ状態にある有であり、後に続く全てのものたちに共通のものとしてある。たとえばそれは円の中心点のようであり、円周へと向かう半径は全てそれに依存しながらも、その中心点がそれ自体で留まることを妨げることなく、その中心点から自己の生成と存在とを得ているのであり、全ての半径は中心点に与っており、それらにとって中心点は不可分なる始源(*ἀρχή*)であり、それらは自分をそこに依存させながら前進したのである¹⁴。

この箇所で「分割不可能」な本性は、事物の存在原因の超越性と自己同一性を持つものとして説明されている。『ティマイオス』においては、「分割不可能なもの」とは知性の対象であり、「分割可能なもの」は感覚的事物である。デミウルゴスによる宇宙創造の過程において前者は後者に対する範型であり、その意味で後者の生成と存在を根拠づけているといえる。それに対し、上記の引用箇所において、「分割不可能なもの」はもはや範型という意味での根拠の位置づけに留まっていはいない。この箇所の「分割不可能

なもの」は以下に述べるような比喩的形象をまとうことによって特別の意味を付与されているように思われる。即ち、「他のものども」は「(この有の)後に続くもの(*τα ἐφεξής*)」であり、この有がないことを「望みもしない」と言われる。後続するものが「望む」能力を持つ点でいわば擬人化されており、先行するものの非有を「望まない」というこの表現は、「先立つもの・原理(*ἀρχή*)」の意味をその多義性に応じて、同様に擬人化された「支配(*ἀρχή*)」の意味に読みとることを可能にする。すなわち、ここには、優れた王の支配と、その王の君臨を必要とし望む臣下の形象が語られていると見ることができるのである。そして、そのような王や臣下の形象を読みとつてよいならば、続く行で「分割不可能な有」の本性が、「第一義的な意味で分割不可能であり、知性的なものどもすなわち諸真実の中で最高の地位にあるもの(*ἀρχή*)」(29-30)であるとまとめられるに至る論述の過程は連続した文脈として見ることが出来る。というのも *ἀρχή* の語には「始まりをなす」という意味と「第一位の、最高の」という意味があり、実詞としてはそれぞれ「始まり」と「王」の意味になるからである。ここではその両方の意味を読むことができるであろう¹⁵。知性は、二八行目の比喩で言えば円の中心点が半径の存在の「不可分なる始原(*ἀρχή*)」であるようにあらゆる存在の「始まり(*ἀρχή*)」であり、かつ、それらの存在の頭上に君臨する最高の支配(*ἀρχή*)者でもある。かくして、「分割不可能な有」は、もはや単に感性的世界のモデルとしてではなく、全てに先立ち全てを支配する、いわば一者としての知性として描かれることになっているのである。

かくして、「分割可能性」の本義的な意味は諸物体の空間的

延長の分割可能性として理解されるが、知性が「分割不可能」であることは、単に「分割可能」の否定であるのみならず、それら諸物体をも含めた一切の諸存在の始原でありかつ支配者の同一性として理解された結果としての表現になっている。換言すれば、「分割不可能」は、王・始原・原理の「同一性」という概念を持ち込むことよって解釈されていると言つて良いであろう。「分割可能」「分割不可能」は、元来、物体を眺める視点に基づく概念であった。この概念が本来帰属する水準とは異なる水準の論述の場合、原理を語る概念としての「同一性」が導入されることよって、開かれることになっているのである。このことによつて、「分割不可能な本性」は支配的・原理的位置づけにおかれるとともに、それ以外の事物も被支配者として位置づけられ、その結果、この説明体系全体が存在論的資格の論点で、地位を基準にして垂直方向に方向付けられることになっている。では、説明体系のこのような垂直的性質は、物体内形相が登場することとどのように関わっているのだろうか。そしてまたこれらの説明は、最終的には、魂の中間者としての位置づけとその両義的規定の意味にどう反映することになるのであるか。これらの問いを念頭に置きつつ、次に物体内形相の両義的規定の意味とその体系的論述における位置づけを検証していくことにしよう。

2 物体内形相の両義性とその位置づけの意味

完全に「分割可能」な本性と完全に「分割不可能」な本性が論じられた上で、両者の中間者として、物体内形相が語られる。かくして物体内形相は両義的存在と見られることになるのである

が、その両義性の意味はいかなるものであろうか。

物体内形相が説明体系に占める場所は、「第一義的に分割可能なもの」(諸物体)との位置関係によつて示されている。『ティマイオス』の *tepl' ta vaitata* の語句を、プロティノスは、文字通り物体との位置関係を示す言葉 (*topos*) と受け取っているのであるが、この位置関係の意味は、三つの前置詞によつて三つの視点から解釈されている。すなわち、その本性は諸物体よりも手前にある (*pro*) が、諸物体の近くにあり (*mes*)、さらには諸物体の中に (*en*) あるとされるのである。これらの表現は、物体内形相をとらえる者の認識論的視野に応じた内容を表している。すなわち、物体内形相は、知性の側に立つ場所から見ると遠近法的な視野において、諸物体よりは存在の位置づけがより知性に近いこと (*mes*)、しかし、四者の本性を考察する俯瞰的な視野において、諸物体に隣り合つて接しており、諸物体との間には媒介するものをもたないこと (*pro*)、そして、おそらくは人間としての現実的感覚的知覚の視野において、諸物体に内在していること (*en*) が示されている。かくして『ティマイオス』の「物体の領域にある」の一節は、「領域にある (*mes*)」の「一面的平面的意味のままにではなく、上記の三様の認識論的視野による位置関係が成立するに至る構造的階層的多面的解釈にとらえ直されていると見ることが出来る。物体内形相の両義的規定の意味は、かかる多層的解釈において明らかにされていると言つてよいであらう。

物体内形相の「分割不可能」とは、「個別に存在する多くのものの中に同時に全体としてあることが出来る」ことであるとき

れ、このことにより、物体内形相は、物体のように「それ自身の本性によって」「第一義的に」分割可能なものではない、とされている。しかし、この「分割不可能」は、物体との比較において一時的に留保された「分割不可能」にすぎず、その限界がすぐさま語られることになっている。すなわち、物体内形相の各部分は、物体の各々の部分の中にあることによって、お互いから完全に分離するとともに、それらの部分が共に同一の影響を受けることがないとされることで、結局のところ物体内形相は「完全に分割されるもの (τάυτη λεγομένον)」であると結論づけられるのである。このような物体内形相の「分割不可能」の限界は、物体内形相が感覚的事物の領域にいわばその存在を依存していることによっている。というのも、物体内形相の各部分がお互いに外在的であり、同一の影響を受けることがないことの理由として、物体内形相と魂のそれぞれの「分割可能」の意味を比較する文脈では、物体内形相が物体の「状態 (τάθος)」にすぎず、「有 (οὐσία)」ではないとされているからである。物体内形相は有ではなく、物体を基体としてのみ存在することができる。言い換えれば、物体内形相は物体のものとなっており、それ故に物体内形相は物体の空間的延長を全面的に引き受けるものとなっているのである。¹⁶⁾

物体内形相の両義性の不均衡さが説明体系においてもつ意味を明らかにするために、物体内形相の両義性を語る別の文脈と比較してみたい。それは、感覚される事物の美を論じる文脈であり、物体を眺める現実的ないし日常的視点に基づく議論であると言って良い。ここでは物体内形相は、感覚的美の認識を成立させるものとして一定の価値を与えられている。すなわち、形

(εἶδος) によって完全な姿を与えられていない素材は醜いが、それ自体が「一 (εἷς)」である形によって各部分が一つにまとめられたときに、その事物の上に美が宿るとされる。¹⁸⁾ この、物体の中に宿る形 (τὸ ἐν οὐσίᾳ οὐ εἶδος) は多くの部分を持ったものとして現れるが (ἐν πολλοῖς παρταλόγιον)、実際には部分のないものである (ἀπέρες οἶον) であるとされる。¹⁹⁾ すなわち、物体内の形相は、現れにおける多と本来のあり方における同一性という両義的本性をもつものとして語られつつも、他方で感覚的認識を支えるものであると同時に雑多な物体に形を与える原因として物体に先立つものでもありと見られ、結果として一的側面が強調されることになっているのである。

上記の文脈においては、物体に統一性を与える一定の原因的な位置づけが物体内形相に与えられ、その両義性はむしろ一性へと傾くのであるが、これに対して IV 2(4) においては、物体内形相の「分割不可能」は、かかる原因的な統一の側面は語られず、むしろ物体の状態 (τάθος) としてその存在の在処を物体に依存し、その結果物体とともに分割されるという、受動的な脆さを持つ限界づけられた「分割不可能」として語られている。

両義性を語る二つの文脈における重心の置き方の違いから、IV 2(4) において物体内形相が論じられることの意義が、ある程度明らかであると思われる。この重点の違いは、感覚知覚の成立を語る文脈と、存在論的身分を論じる文脈の違いに即しているといえる。前者は一であるか多であるかを問題にする文脈であり、後者は有であるか、それとも他者の性状であるかを問題にする文脈である。IV 2(4) は、物体内形相を多層的説明体系内に位

置づけ、物体と魂の両者と比較しているという点では、視点を異にする二つの文脈を「分割不可能」「分割可能」という概念によっていったんは接合することになっていっていると見てよい。しかし、物体内形相の最終的な本質規定が「完全に分割可能」であると論じる点は、明らかに、存在論的な観点から IV 2(4) の議論の基調であることを示している。であるとすれば、感覚知覚を語る文脈の視点における「分割不可能」を、感覚を超えた存在論的身分を語る議論における「分割不可能」と区別する必要が生じるであろう。先に述べた両義性の重心のおき方の違いから、物体内形相は、異なる視点に応じて異なる「分割不可能」を示すという理解が得られる。すなわち、物体内形相の本性の規定が、他との比較の場に依存するものであるならば、IV 2(4)での物体内形相の論述の目的は、IV 2(4)が論じているところのまさに魂との直接的比較にあるということが明らかであろう。つまり、IV 2(4)の体系的論述の中に物体内形相が位置づけられることの意義は、魂との直接的比較における意義なのである。従って、IV 2(4)における『ティマイオス』解釈に両義的な物体内形相が登場することは、魂の両義性の意味解釈に、まさに魂の両義性自体の問題として、直接関わってくる比較上の問題であると言つてよい。我々は次に、魂の両義的規定そのものをめぐる論述箇所を検証することによつて。

3 魂の両義的規定の問題—その位置づけと二者的本性

魂の両義的規定をめぐる論述は、魂が知性に対してもつ関係性の論述と物体内形相との比較を経て、IV 2(4)の一章の終わりでいったんまとめられる。そこから IV 2(4)の終わりまでの議論

は、一章のまとめ部分での一定の結論を受け継ぎつつ、魂を眺める新しい視点が提示されていると思われる。我々はそれぞれの部分を順番に見ていきながら、この位相差が持つ意味の考察を通じて、魂の両義的規定を検証することによつて。

(1) 体系的論述における魂の位置づけ

まず、魂が如何にして体系内に位置づけられるのかを見ることにしたい。質の所在が物体との位置関係によつて語られたのに対し、魂の所在は知性との位置関係に基づいて明らかにされている。

「他方で、かの完全に分割不可能なもの近くに (τιπος)、かのものから生じ (απο) かのものにつく (ἐξ) 別の有があるのであり、その有は、あのものに由来する (απο) 『分割不可能であること』を持ちつつ、他方で、自ら前進することによつて (προσθη τῆ ἀπ' αὐτῆς)、他のものへ突進すること (προσδοσθη)、分割不可能で第一のもの、諸物体を在処とする²⁰ 『諸物体の領域で分割可能なもの』の両者の中間に座を占めたのである (eis μέσων αὐποδιν κατέστη)²¹」。

この箇所では魂の知性との「近き (τιπος)」と、知性に由来するという出自 (απο) と同時に、魂がみずからの運動によつて中間者となったことが語られている。『ティマイオス』における「第三の有」は「分割不可能な有」と「分割可能な有」から混ぜて造られ両者の中間におかれたとされているが、プロティノスの解

釈では魂が中間者となるのは「分割不可能な有」を起点として「分割可能な有」へと前進する魂自身の「前進」・「突進」によることになっている。この「前進」・「突進」は、魂が居場所を移動し、その移動を完了させ、それによって自らの場を知性から切り離してしまふような運動ではない。以下のテキストにあるように、魂は移動の運動「以前」のあり方を保ちつつ物体の領域へ生ずるとされている。魂が座を占めた「両者の中間」とは、知性に自己の根源を保ちつつ物体へ向かう魂の運動の延び広がりそのものである。

「分割不可能なもの（知性）の近くにあるために、上述のもの（物体内の形相）の上位にあると我々が言っているところのもの（魂）は、有でありながら、なおかつ諸物体の中へと生ずるのであり、諸物体の領域ではこの有にも分割されるということが起こるのであるが、諸物体に自己を与えるより以前には（*ἔμπροσθεν*）分割を受けることはないのである。実に、この有が諸物体の中に生ずるときには、たとえあらゆる方向へ広がる最も大きな物体の中に生ずるのである」と、一つであることを放棄しないままで、その物体の全体に自らを与えるのである（傍線筆者）²²⁾。

「（魂の前進という事態より）以前（*ἔμπροσθεν*）」という事態の概念が、魂のあり方を二つに、すなわち魂の本来的存在状態と、諸物体の領域における非本来的なあり方とに分けている。魂の両義性は、そのように上下に階層化されたあり方に起因してい

²³⁾る。魂の「分割不可能」とは「以前の」「有」としてのあり方を保ち続けていることであるとされ、この点が、魂のあり方を物体内形相のそれと区別する最大の根拠となっているのである。物体内の形相が自己の存在の原因を自己のうちに持たず、いわば「物体のものになってしまつてしまつてしまつてしまつていた」とは異なり、魂は、存在の原因を自己の内に保つことによって「自分自身と共に全体であり続けている」とされるのである。この魂の出自と、「以前」からの「有の持続的な保持が、魂の両義性に大きな偏りを与えることになる。ここまでの議論をまとめる IV 2(4) の一章の終わり、魂が「分割可能」となるといふ魂の前進以後の事態は、魂の本質的あり方 (*οὐσία*) とは関わりのない、物体の領域で、物体の故に生じた、物体側の結果であると述べられることになっている。「分割可能」は物体の側での状態であつて、反対に、魂自身は、有であり続けていることによって、「むしろ分割されてもいないし、分割されたものになつてしまつてもいない」のである。

(2) 二者としての魂

魂の両義性は「分割不可能」に重心を置いたものとして語られることになつたのであるが、このまとめの部分には、ここまでの議論とは異なる視点が提示され、これ以降 IV 2(4) の終わりに至るまでがこの視点に貫かれた議論になつていふと思われる。我々は IV 2(4) においてこの視点が登場することの意味を考えてみたい。

「このことを見る人 (*ὁ τούτο κατιδόν*) は、魂の大きさと

その力を観て、魂というものがいかに神的で (θεῖον) 驚嘆すべきである (θαυμάσιον) かを、そして魂が諸事物を超えるものどもに属している (τὸν ὑπέρ τὰ χεῖρατα φύσει) ことを知るであろう。魂は大きさを持たずにありながら、あらゆる大きさとともにあり、しかも、ここにありながらまたあそこにも、別の部分によつてではなく、同じものによつてあるのである。従つて、魂自身は分割されていながらもなおも分割されないことになる。否、むしろ、魂自身は分割されてもいないし、分割されたものになつてしまつてもいないことになる。なぜなら、魂は自分自身と共に全体であり続けているからであり、物体の領域では分割されているが、それは諸物体が自己固有の分割可能なものの故に魂を分割しない仕方で受け取ることが出来ないためなのである。かくして、分割とは、諸物体が被ることであつて、魂が被ることではないのである²⁴」。

この箇所では、ここに至るまでの議論にはなかつた、「このことを見る人」の視線が語られている。この視線の登場は何を意味しているのだろうか。視線の先にある「このこと」とは、魂が有として同一性を保ちながら、多なる諸事物のどの部分にも備わるあり方のことを指していると考えられる。かかる魂の両義的あり方が「神的で驚嘆すべきものである」の認識を導くのである。

少なくともここで言えることは、この視線は、もはや、四つの本性を「分割可能」「分割不可能」の概念を尺度に、俯瞰的に客観的に眺める視線ではなく、それどころか、魂を、「諸事物を超

えるもの」の一員として、すなわち感性界の場から見た超越者として、称賛を以て見る姿勢を持つ視線であるということである。それは、魂を神として、驚きとともに見つめる非俯瞰的な存在からの、すなわち現に感性界を生きる人間の位置からの視線なのである。さらに、この視線の登場は、魂の両義性を論ずる論調が、魂によつて生かされる感性界そのものを眺める仕方での語り方に移行することと連動していると思われる。実際、これ以降の論述は、魂が「分割不可能かつ分割可能」であることを背理的論述によつて主張する部分と、魂の「一かつ多」及び「分割不可能かつ分割可能」な本性の意味をまとめる部分から成るのであるが、両方とも「このことを見る人」の視線と同一の水準に属す議論であると思われるのである。この視線が、魂の何を眺めることになるのか、これらの議論を順番に見ていくことにしよう。

まず、IV 24a) の二節の始まりにおいて、魂が完全に「分割可能」でも完全に「分割不可能」でもなく、「分割不可能かつ分割可能」でなくてはならないことが背理的に二つ主張される。その主張内容は注目に値する。即ち、一つの主張は、もしも魂が完全に分割可能であれば、感覚が不成立となるというものであり、もう一つの主張は、魂が完全に分割不可能であつたなら、生き物が命を持たない塊のままであり続けることになつてしまふというものである。ここで注目すべきは、とくに感性界における生き物の活動の成立に言及している点である。これらの背理法での主張のめざすものが感覚の成立可能性と、生き物が生きるといふ事態の成立可能性であることから、生き物に命を与え、その活

動を可能にするものとしての魂の働きという特定の場面が考えられていることが分かる。このとき、魂の両義性の問題は、いかにして一が多に宿るかという抽象的形而上学的な問題ではなく、生き物が自らの内に多様性を持ちつついかにして一つの生命体としてあるのか、その成立の根拠を具体的現実に問題とする議論となっているといえよう。

さらに、IV 2(4)のまとめの部分において、プロティノスは、「一かつ多」および「分割不可能かつ分割可能」という本性を、宇宙に命を与える思慮深い指導者としての魂の本性として語っている。

「かくしてこのように魂は、一であるとともに多であり、分割可能でありかつ分割不可能であることが必然なのであって、同じ一つのものがあらゆるところにあるのは不可能だとは、信じてはならないのである。なぜならもしもこのことを我々が受け入れるならば、万有を保持し管理するもの(ἡ τὰ πάντα συνέχουσα καὶ διακρούα φῆσις)²⁵、すべてを一挙に取り巻き、思慮によって導くものがないことにならうからである。万有が多である故に、その導き手は多であり、保持するものが一つであるために(ὡς ἡ ἐνιαυ συνέχου)その導き手は一なのである。自らの多なる一によってあらゆる諸部分に命を与え、分割不可能な一によって思慮深く導くのである。思慮が備わらない者どもは、この一なる指導者を模倣するのである」²⁶。

この、宇宙に命を与える導き手のあり方を語る文脈において、魂の一性と多性の二つの側面は、明らかに、対等に扱われる図式になってはいない。導き手が多であるのは、万物が多であるという事実によるのであるが、導き手が一であるのは、「(万物を保持するものが)一つであるために(ὡς ἡ ἐν τὸ συνέχου)」という目的によるからである。この目的は、「命を与え」、「思慮深く導く」という目的に直結する目的に他ならないであろう。

魂の「分割可能」の意味は「多なる一」として語られている。「自らの多なる一」によってあらゆる諸部分に命を与える「ことが、魂の「分割可能」の根拠となっている。魂の「分割可能」とは、生命が有機的な一的な力を持つこと、或いは力が力として成り立つための条件としての一性でありながら、生き物の体の全体にその力が及んでいることによる多性なのである。

他方で、魂は「一である指導者(τὸ ἐν τὸ ἡγουμένον)」として描かれている。つまり、魂の「一」と「分割不可能」の意味とは、魂が「思慮深い指導者」であることなのである。プロティノスは「思慮深さ」を付け加えることで「一」と「分割不可能」に価値論的・特権的性格を与えているといえよう。²⁶ここから明らかなのは、魂は、知性界と感性界の両方に関わるという意味での単なる橋渡しの役割を果たす場所的(27)中間者としてだけでなく、感性界を存在へとつなぎとめる紐帯(27)という価値を伴った指導的(27)仲介者としても語られているということである。すなわち、この魂という紐帯が、自分では命を持たないものに命を与え、多を一つのものとしてその存在が失われないよう保証する仕方で、万物を生ある存在へとつなぎ止めているのである。そしてそれは知性的性格を

もつ意味で思慮深い働きなのである。このような生命と存在の思慮深い与え手として眺められた魂の価値こそが、「このことを見る人」を驚嘆させ、魂を神的なものと認識させるのであるといつてよいであろう。「分割不可能」とはそのような一なる導き手としての、いわば一者としての魂の価値あるあり方なのである。

プロティノスの『ティマイオス』解釈に、このような「神としての魂」という位置づけの視点が現れることについて、トゥルイヤールの言葉を借りて、プロティノスは『ティマイオス』を読むとき、そこに『パルメニデス』を見いだしている」と述べてもよいと思われる。というのも、プロティノスは『パルメニデス』を解釈して、魂を、三つの一（一者、知性、魂）のうちの第三の一として位置づけているからである。実際、IV(24)に述べられた、魂の感性界に対する指導者としての位置づけとその働きを眺める視線を語る並行テキストは、魂を一者、知性と並べて三つの原理的存在ないし「三つの一」の一つとして語るV(110)論文の中にも現れるのである。²⁹⁾『ティマイオス』解釈における「両義的な魂」と「第三の一としての魂」はプロティノスにおいて接合しているのである。そう考えることが許されるならば、一見唐突な仕方でもとめられたIV(24)の最後の二節も理解されるように思われる。プロティノスは次のようにIV(24)を締めくくっている。

「かくして、魂はこのような仕方で一かつ多であり(εἰ καὶ πολλά)、物体内形相は多かつ一であり(πολλά καὶ εἷς)、諸物体は端的に多であり(πολλά μόνον)、もつとも高みにあるものは端的に一である(εἷς μόνον)」。

我々はこの一節を、『パルメニデス』的な定式的表現による締めくくりであると理解したい。それは魂の「両義性」と「一性」を接合するプロティノス独自のプラトン解釈なのである。

以上から我々は、プロティノスは『ティマイオス』解釈としての魂の本質規定を、一者としての魂の神的・価値的な位置づけと役割を背景に解釈し、「分割不可能かつ分割可能」を「第三の一」の「一かつ多」として理解することになると結論づけたい。従つて、魂の両義性もまた、感性界を存在させる魂の一者としての価値づけ故に不均衡な両義性となっているのである。そしてこの不均衡な両義性を魂が持つことによって、より下位の存在に対して生命と存在を付与する魂の価値的地位をプロティノスは明らかにしているのである。

結語：IV(24)の体系的言説の意義

序で示した最初の問いに戻ることしよう。魂の本性を論ずるときに、知性、魂、物体内形相、物体の四つの本性が立てられることの意味は何であろうか。『ティマイオス』の魂創造説の解釈として物体内形相を他の三者と並べ論じるプロティノスの解釈を、マールランは、魂を肉体による汚染からできるだけ引き離そうとする傾向の産物と見ている。³⁰⁾『エンネアデス』には確かにそうした傾向があるかもしれない。たとえば、プロティノスは、感覚知覚や情念の成立など魂が物体と関わり物体から影響を受けていると一般に考えられている日常的ないし人間的な出来事を取り上げ、それらが成立するプロセスを階層的に解釈し、物体から

の作用を直接に受けるものを魂から区別することで、魂へ物体からの影響がないことを主張しているのである。³²⁾そして確かに、IV 2(4)も、魂と物体の間に物体内形相を挟むことによって両者を遠ざけることになってはいる。しかし、IV 2(4)において、この「傾向」が四つの本性を立てたことの理由であるという見方は、蓋然的な類推以上のものではないように思われる。このテキストで魂と物体が隣り合っていないのは単に結果的なことであるかもしれないのである。また、仮にマーランの理解が正しいとしても、IV 2(4)の『ティマイオス』解釈を『エンネアデス』の他の多様な文脈に接合しうる体系的かつ規範的位置づけのテキストと見なしうることからすれば、この「傾向」を唯一の理由と考えるのは一面的にすぎると思われる。我々は、この体系的言説そのものにおける必然性を考えなくてはならないであろう。

IV 2(4)の『ティマイオス』解釈は「分割可能・分割不可能」の概念を厳密化する議論として進められていた。この概念を文字通りに厳密に語るために、「物体内形相」を論ずる必要があったと見る必要がある。前節で見たように、魂は、知性界と感性界の単なる仲介ではなく、物体を配慮し導く一なる指導者として、宇宙への命の与え手として解釈されていた。このような魂は第三の一として見られた魂である。そのため魂の両義性は「分割不可能」に重心を置いた偏倚的両義性となっているのであるが、ここでもし、もう一つの方向に重心を置く中間者が必要であるとしたら、その必要性は何であろうか。まず考えられるのは、シンメトリーの論理の価値を重んじる立場である。それは、偏りを補うことで体系の完全性を目指すという、体系構築的・秩序化的気

質にふさわしい立場である。しかし、魂の両義性の「偏り」への補填という動機に従って体系的整合性を形式的に追求したとしても、それだけにとどまらない。何故なら、生き物の各部分に行き渡り命を与える神的な力の（魂の）「分割不可能かつ分割可能」の意味を、物体の各部分に色や形が行き渡ることの完全に物体的な（物体内形相の）「分割可能かつ分割不可能」の意味と比較し、区別するという仕方では、魂の非物体性と、物体内形相の物体性の両者の対比を先鋭化させる目的があったと考えられるからである。

体系的説明を構成する四つの本性という構成員については、別の問いの方向もあり得るであろう。それは、何故、この四つのみであって、これらに加えて一者や素材が登場しないのか、という問いである。この問いには、イガルやエミルソンがそれぞれ取り組んでいるが、ここではそれらの見解を詳しく検討する余裕はない。³³⁾我々としては、構成員が四つであることが意味を持つという立場から、一者や素材が登場しないことの理由は、むしろIV 2(4)があくまで『ティマイオス』35aの一節の解釈に限定した議論として、二世界説的視点に基づきつつ仲介者である魂の両義性の意味の解明に照準を合わせているからだと考えたい。IV 2(4)は、感性界が生きて存在している成立根拠として見られた魂の両義性を語るという、限定された目的のための議論の舞台なのである。

【註】

- (1) cf. Schwyzer, H.-R., *Zu Plotins Interpretation von Platons Timaeus 35A*, *Rheinisches Museum für Philologie*, N. F., (84), 1935, pp. 360-368.
- (2) 「分割不可能かつ分割可能」という魂の性質または、魂が一つでありながら宇宙のあらゆる部分に備わることを述べる記述が、IV 9(8), 2; V 1(10), 2, 35-7; II 2(14), 1, 39; IV 1(21); IV 4(22), 4, 33; IV 3(27), 19 に見られる。
- (3) Blumenthal, H.J., *Plotinus' Psychology*, Martinus Nijhoff, The Hague 1971, p.4.
- (4) 本稿は新プラトン主義協会第一四回大会（於神戸市外語大学）におけるコロキウム発表に基づくものである。『エンネアデス』のテキスト解釈を示すというコロキウムの趣旨に即して、IV 2(4)のテキストの検証を通じてこの問題を考えることにする。
- (5) IV 2(4).1.10-11.
- (6) *Tim.* 35a1-4. τῆς ἀμερίστου καὶ ἀει κατὰ ταυτὰ ἐχούσης οὐσίας καὶ τῆς αὐτῆς περὶ τὰ σώματα γυγνομένης μερίστης πλείτων ἐξ ἀμφοῖν ἐν μέσῳ συνεκράδατο οὐσίας εἶδος. 「(神は)不可分で常に同一を保つ『有』と、他方また諸物体の領域に生じる分割可能な『有』の中間に、その両者から、第三の種類の『有』を混ぜ合わせて作りました」(訳は『プラトン全集』一二、岩波書店、一九七五年に基づく)。
- (7) 『ティマイオス』35a2-3の「諸物体の領域に生じる分割可能な有」は一般的には諸物体を意味すると解される。cf. Cornford, F. M., *Plato's Cosmology*, Cambridge, 1935.
- (8) cf. Merlan, P., *From Platonism to Neoplatonism*, The Hague, 1975, p.37.
- (9) プロティノスにおいて空間的延長は物体の単なる属性ではなく、物体の本性である。プロティノスが空間的延長の有無を基準にして物体と非物体を徹底的に区別したことは、エミルソンの研究で知られる。さらにティロンはその区別を心身問題として議論を展開させている。cf. Emilsson, E. K., *Plotinus on sense-perception: A philosophical study*, Cambridge, 1998, pp. 145-7; Dillon, J., *Plotinus, the first Cartesian?*, *Hermathena* 149, Dublin, 1990, pp.19-31.
- (10) cf. IV 3(27), 20,10-13.
- (11) cf. *Tim.* 37a.
- (12) フリッソンはプロティノスにおいて「塊」であるか否かが下記の対立項の判別基準となっていると指摘している：知性的／感覺的、内在的／外在的、分割不可能性／分割可能性、一性／多性。彼が言っているのは、特に IV 2(4) に於いてこの二つが顕著にみられる。cf. Brisson, L., *Entre physique et métaphysique. Le terme ôykos chez Plotin, dans ses rapports avec la matière (ύλη) et le corps (σώμα), Étude sur Plotin, sous la direction de M. Fattal*, Montréal, 2000, p. 110.
- (13) ἐπιχειρεῖν という動詞は、存在の位階において上位のものが下位のものに力を及ぼしていること、または下位のものに対する超越的なあり方をしていいること、またはその両方

を語る場面で使われている。cf. I 1(53), 8, 9; I 6(1), 3, 12; II 2(14), 3, 5; II 5(25), 5, 10; IV 3(27), 7, 17: 31, 16; IV 4(28), 27, 15; IV 5(29), 6, 17; IV 7(2), 5, 24.

(14) IV 1(2), 1, 21-29.

(15) ἀρχηγόςの語が用いられているのは『エンネアデス』中この箇所のみである。スリーマンはこの意味を“primary, chief”としている。比較的新しいブリッソンとプランドー監修の翻訳書は、この箇所への注で悲劇の用例を紹介し、「王」の意味を読み取る可能性を示唆している。我々はその両方の意味で読むことにしたい。cf. Sleeman, J.H., *Lexicon Plotinianum*, s.v., Leuven, 1980; Plotin, *Traité I-6, traduction sous la direction de Luc Brisson et Jean-François Pradeau*, Paris, 2002, p.181, n. 10.

(16) 物体内形相の物体への依存的性格は IV 4(22), 1, 17-26 においては一層はつきりと述べられている。「甘さや色は物体の隅々まで行き渡っている。……その性状は物体のものである。物体はその性状を自らに付随する状態として全体的に所有しているのであって、その性状はそれ自体では決して存在せず、物体に所属しているときのみ知られる。だから、その性状は、自らの属する物体と同じ拡がりのものとなる」。

(17) I 6(1), 2-3. 物体内形相の一的側面を語るテキストは多くないが、他にも、ストア派、アリストテレスを含め、物体や物体の存在性格やそれらの現実的事実を重んじる傾向にある人々に対して非物体的な存在があることを示す文脈で、

物体内形相の同一性の側面が強調されている。cf. IV 7(4), 81; IV 7(4), 5.

(18) I 6(1), 2, 16-22.

(19) I 6(1), 3, 5-15.

(20) ἐν τῷσ σῶμασιν. ἐν τῷ LSJ の B.1 の意味で読むことにする。cf. Liddel&Scott, revised by Jones & McKenzie, *Greek-English Lexicon (LSJ)*, s. v., 1968.

(21) IV 2(4), 1, 41-47.

(22) IV 2(4), 1, 53-59.

(23) イガルは、IV 2(4) において魂は同時に「分割不可能かつ分割可能」であるとされ、分割不可能な部分と分割可能な部分は混ぜられ、このものと理解しているが、他方で IV 1(21), 14-22; IV 3(34), 19, 27-34 の魂の上下の部分は混ぜられていないとする箇所をとらえ、プロティノスの思想に変化があったとする。しかしそもそも IV 2(4) において、魂の分割不可能性と分割可能性は魂の物体への前進の「以前」「以後」として、言い換えれば魂の有と魂の下部のものへ向かう働きとして階層化されているのであり、二つの階層が「混ぜられて一つになっている」わけではない。cf. Igal, J., *Aristoteles y la evolución de la antropología de Plotino, Pensamiento*, 1979, pp. 315-45, esp. p. 321, n.18.

(24) IV 2(4), 1, 66-76.

(25) IV 2(4), 2, 39-49.

(26) 本稿第一節で見た知性についての論述の場合と同様、ここにも擬人化された形象的説明と見ることができると

う。生命の成立は賢い指導者の指導に存しているのである。指導者を性格づけることもプロティノスが忘れていないことは注目に値する。ここから現世の生命にも、ある種の思慮深さを反映するものを、プロティノスが読み取っているとしうるのである。

- (27) 以下の並行テキストを参照。「魂は最良の者たち (i.e. 諸真実在) に隣接するところに位置していて、驚嘆すべき力を得て動いているので、ひとたびこの魂の内におかれたものが何か、それから逃れ去って、非存在の内へ没することが、どうしてできようか。そして神 (i.e. 知性) から出てきた魂を、いかなる紐帯 (δεσμός) にも勝って強力であると考えないことは、万有をかかえ持つ原因 (αίτια συνέχουσα τὰ πάντα) にあって無知な人間のすることである」(II 1(40), 4, 14-18) .

- (28) cf. Trouillard, J., *L'âme du Timée et l'Un du Parménide dans la perspective néoplatonicienne*, *Revue internationale de philosophie: revue trimestrielle*, 1970, n.92, pp. 236-251,

- (29) ここでは、探求者が一者へと上昇していくための前々段階として、宇宙の全体とその中の事物に命を与える宇宙の魂を眺めることが勧められ (σκοπέισθε) 、多なる宇宙にいかにして魂が一なるものでありつつ命を与えるのが、魂の神的・原理的価値を一層強調する論調で述べられている。cf. V 1(10), 8, 1.

- (30) IV 2(4), 2, 49-55. cf. IV 2(4), 2, 40; IV 7(38), 14, 12; V 1(10), 8, 24-25; V 3(49), 15, 22; *Parm.* 144e. IV 2(4) のこ

の箇所を『パルメニデス』への言及箇所としてあげている校訂または訳本は二〇〇二年のブリッソンとプラドー監修の翻訳書まで見られない (cf. *op. cit.* p. 182, n.28) 。しかし、分割可能性の語彙を用いて始まった議論が一と多の語彙による定式的表現で終わるといって、一見唐突な終わり方への説明として、『パルメニデス』への言及と見ることは有力な解釈となるであろう。「一」を語る特有の垂直的文脈が IV 2(4) にあるとする我々のテキスト解釈からしても、この箇所の「一」と「多」の語彙による表現は『パルメニデス』解釈の流れを汲んでいるものと考えうる。勿論、その場合、他の『パルメニデス』言及箇所では一者を指している μετόνομα という言葉が、この箇所で知性に対して用いられていることは問題となるであろう。IV 2(4) の文脈の中だけで見ると、「一」「分割不可能」とされている知性が εν λόγῳ と呼ばれること自体はおかしくはないので、『テイマイオス』に基づく分割可能性の語彙による語り方を、一と多の語彙による語り方に移したことによって規定に揺れが生じる結果になったと思われる。

- (31) cf. Merlan, P., *op. cit.*, p.37.

- (32) 例えば、感覚知覚を論ずる議論においては、感覚知覚のプロセスを階層的に解釈し、感覚対象からの影響を受ける役割を肉体と肉体に生じる形相とし、魂にはその形相のあり方を判定する能動的な役割のみが割り当てられることになつてゐる。

- (33) イガルとエミルソンの説を簡単に紹介すれば、まずイガル

は、ここでは「存在の四段階 (quatro grados de ser)」が数えられているのであって、存在以下である素材と存在を超えた一者は語られていないとしている。しかし、エミルソンも指摘している通り、IV 2(4)では有 (ovía) (知性と魂) と有でないもの (物体と物体内形相) が区別されているのであり、そのことからして、IV 2(4)に「存在 (ser)」という言葉で一律に四者を語る視点があるとは考えがたい。IV 2(4)において四者に共通に用いられている言葉は「本性 (φύσις)」というニュートラルな語のみである。他方、エミルソンは、IV 2(4)においては一者が知性と区別されずに知性に織り込まれた仕方では語られているという説を出したがオメアラとの議論で考えを変え、プロティノスが自らの体系の中から、『ティマイオス』解釈にあたって扱うべき要素に限って語っているというオメアラの考えを(疑問を残しつつも)採用している。我々の理解も、このオメアラの説と同じ方向である。cf. *Plotino, Enéadas III-IV*, introducciones, traducciones y notas de Jesús Igal, Madrid, 1985, pp. 281-282; Emilsson, E. K., *Soul and μενοειός, Studi sull'anima in Plotino, a cura di Riccardo Chiaradonna*, Napoli, 2005, pp. 91-92.